

2026 年度川淵賞（和文部門）受賞の御礼

横浜市立大学大学院・医学研究科脳神経外科学
神奈川県立こども医療センター脳神経外科
圓谷研人

この度は、栄誉ある川淵賞を賜り、大変光栄に存じます。2026 年 6 月 6 日、快晴の鎌倉の地で表彰していただき、大きな喜びとともに身の引き締まる思いを新たにいたしました。日本小児神経外科学会関係者の皆様ならびに選考委員の先生方に、心より御礼申し上げます。

本研究は、日常診療の中で抱いた疑問から着想したものです。脳室腹腔シャントの成績は近年向上している一方で、依然としてシャント不全を繰り返し、複数回の再手術を要する患児も少なくありません。また、デバイスや手術手技の選択には各施設の経験に依存する部分も多く、十分なエビデンスが蓄積されていない現状があります。当院では、成長に伴うシャントチューブへの負荷を軽減する目的で、前角穿刺の際にカーブを作成する工夫を行ってきました。そこで、その有効性を客観的に検証したいと考え、本研究を実施しました。神奈川県立こども医療センターにおいて 2012 年から 2022 年までに脳室腹腔シャント術を施行した 167 例を対象とし、シャント生存率およびシャント不全に至る要因について後方視的に検討しました。シャント 1 年生存率は 82.3%、シャント 2 年生存率は 78.4%でした。シャント不全の要因については、単変量および多変量解析のいずれにおいても有意な因子は認められませんでした。一方で、前角穿刺群と比較して後角穿刺群では、シャント不全時の年齢が有意に高いという結果が得られました（前角穿刺群 1.83 年 vs. 後角穿刺群 5.19 年, $P=0.022$ ）。成長期における身長増加がシャントチューブへ影響を及ぼす可能性が考えられ、適切なカーブ作成などの工夫によってシャント不全のリスクを低減できる可能性が示されました。今後の小児水頭症治療および脳室腹腔シャント術のさらなる発展に寄与することを願っております。

最後に、本論文は共著者の先生方をはじめ、横浜市立大学大学院・医学研究科脳神経外科学および神奈川県立こども医療センターの多くの先生方のご指導、ご支援のもとで完成したものです。この場をお借りして深く感謝申し上げます。今後も日本小児神経外科学会の発展に少しでも貢献できるよう、臨床・研究の両面において一層精進してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。この度は誠にありがとうございました。

<受賞論文>

小児水頭症に対する脳室腹腔シャントの長期成績と再建例の検討

圓谷研人, 広川大輔, 矢澤 理, 福山龍太郎, 佐藤博信 小児の脳神経50巻1号 pp 1-7, 2025